北海学園大学附属図書館報

図書館だより

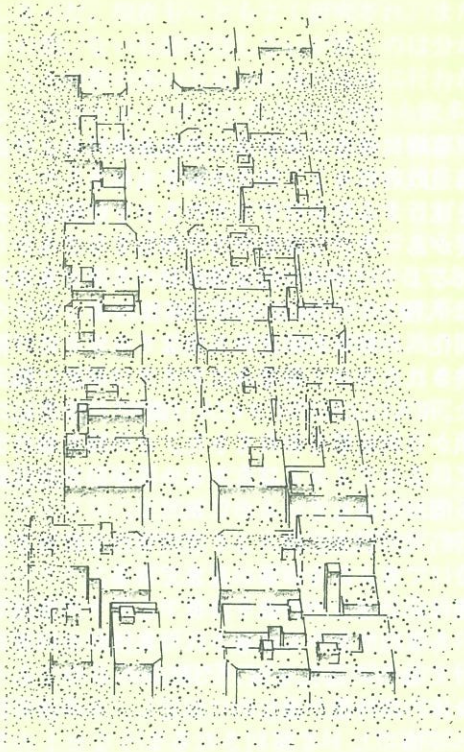
2000.1.20

第21巻4号

通巻152号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

雪の風景



カットと文　須田邦昭

「枕草子」に「雪いとたかうはあらで、うすらかにふりたるなどは、いとこそをかしけれ。(174段)」とある。中国から伝えられた八景の観賞法では、夕暮れの静寂な時に見る雪の風景を美しいものとする。ほんのりと降り積もるか、細雪ぐらいがふさわしいであろう。薄化粧で少し丸みを帯びた中に、なお素顔を覗かせる風景。身心を穏やかにして見ることが出来る風景である。絵になる風景である。

北国に降る雪はその余裕を与えてくれそうにない。圧倒する降雪は、時に視界を遮り近景のほかを許さない。猛吹雪は、変幻自在に迫る。地吹雪は、砂漠の風景を想わせて、無限の荒野に投げ出されたような錯覚に誘う。のしかかり、まとわりつく雪に、風景を形造るすべてのものが萎縮しても見える。耐え忍ぶような光景ではないか。

「北海道文学全集（立風書房）」がある。その多くの場面に、猛吹雪が登場する。風のいななくような音を加えて、荒れ狂う猛獣のようにも描かれる。不安や困難を予感させる風景なのである。降り始めの場面は、事の終わり、終わりの始まりを告げるふうであり、黙して降り落ちる雪は舞台に下り始めた緞帳を想わせて回想に引き込むような余韻を残す。ようやく降り止み、太陽に照らされて輝く雪の場面もある。それは待ちこがれたものが訪れる期待と、一時の安らぎを表すようだ。だが雪の輝きがかえって強迫する風景に描かれることもある。再び始まる永い降雪の予告であり、憂鬱で不安な出来事の前触れとなるのである。

実際、北国の雪は、あれこれと暮しへの思案に駆け立てる。その心情を込めた風景を文字は描く。だが文明に守られ、より快適になる冬の暮し。そのゆとりなのか、思わず雪の美しさに目を向ける。

（すだ　くにあき　工学部教授　建築計画・意匠）

■ p.2-3. アイヌ語という言語　■ p.4-5. 部室拝見④ YOSAKOIソーラン祭り北海学園大学チーム　■ p.6. おすすめしたい韓国　■ p.7. 閲覧室、レファレンス・サービス係　■ p.8. 日本式カタカナ英語を考える（その二）

アイヌ語という言語

切替英雄

江戸幕府にせよ、維新後の明治政府にせよ、また北海道政府にせよ、同化政策を当然としつつ、それを遂行するためにアイヌの人口を把握しておく必要があった。しかし一方で明治6年ごろから作られるようになった国家構成員の名簿である戸籍には人種ないし民族を問う項目は入っていない。同化への期待が同化の具現よりも早くに戸籍に反映されたのか。ちなみにアイヌは平民に編入された。和人によるアイヌの人口調査は19世紀の始め頃から何度も行われてきた。その調査報告書を見ているとアイヌと認定するか否かの判断に調査する側が苦慮しているのに気づく。

「人種」と「民族」は、よく混同されるけれども一応分けて考えた方がよい言葉である。

人種は同じ遺伝的特徴を共有するヒトの集団である。ある程度他から隔離された集団が長い年月をかけて独自の進化を遂げた結果のものであろう。身体的諸特徴が遺伝的に固定し、その固有性によって他のヒトと区別されるようなヒトの集団、それが「人種」である。

一方、民族は伝統的な生活様式、すなわち文化、を共有する人間の集団である。これもまたある程度隔離された集団がそれぞれ長い年月のうちにはぐくんできたものであろう。

犬が好きな私は、人間が犬にしたように、神が人間と人間との隔離を徹底し、その交配をコントロールしたならば人種の幅はチンとボルゾイよりも大きくなっていたかもしれないと夢想する。文化の多様性の方はどれほどのものとなったかは想像もつかない。このような思考実験を経れば、差異を生む隔離なるものがそれほど徹底的なものでなかったことがわかるのではなかろうか。同時に「人種」や「民族」という隔離を前提とした概念があやふやなものに思えてきはしまいか。

'ájnu「アイヌ」、sísam「和人」という（シサムのアクセントは、日本語で「ご飯」と言うときのような発音だ。「五万」のようには発音しないでほしい）。二つの人間集団の違いは現在では人種的にも民族的にもかなりあいまいであるように見える。たとえば言語である。言語は人間を民族に区別する際に用いられる文化的諸特徴の代表選手とされることが多い。しかし、アイヌ語が話せないし聞いても分からないというアイヌは多い。それならば、それらの人はアイヌではないのか。いいや、そんなことはない。

人種・民族は行政によっても、また、科学的にも規定することはできない。アイヌがアイヌであることは内からはアイヌ自身による思いこみ（「われわれ意識」）、外からはシサムからの決めつけによって支えられている。つまり「アイヌである」ことは主観的なことなのである。では単なる幻想なのだろうか。そうではない。アイヌは社会的実体として厳然としてある。しかも最近アイヌであることの自己認識が肯定的かつ積極的に行われるようになってきた。それにつれてアイヌ語の学習が盛んになってきた。アイヌがアイヌとしてのアイデンティティーを強めシサムとの差別化を模索している現れと見える。私は小学生時代、先生の「今では和人もアイヌもなく同じ日本国民としてみんな同じように暮らしているんだよ」と言った言葉を今でも覚えている。ベクトルは逆方向に向かっている。

アイヌ語について少し考えてみたい。アイヌの人口は一万五千から二万数千人の幅で変動している。また思考実験になるけれど、かつてその全員がアイヌ語のモノリンガルであったとしよう。シサムの人口が増大していくにつれアイヌの人口は相対的に減少していく（図を参照されたい）。恐ろしい勢いである。アイヌが生きて行く上でどれほどの困難を感じたか想像してほしい。その間、アイヌ語と日本語のバイリンガルが増加し、アイヌ語のモノリンガルは減少していく。少数民族言語の衰退はまずバイリンガリズムから始まる。大正6年にはアイヌのモノリンガルが約350人いたと

されているから、その周りにはかなり多くのバイリンガルがいたと推定される。この頃のアイヌの児童の多くもアイヌ語と日本語のバイリンガルだったと思われる。しかし、学童期に入るころからほとんどの子供は母語であるアイヌ語を使わなくなったと推定される。子供は周囲の優勢な言語にしたがう。しかも当時は「同化」を当然とする風潮がシサム側にもアイヌ側にもあったと思われる。親が子に母語を強制したということは私の知る限り一例しか知らない。たとえそんなことがあったとしても、多くの子供たちの心に母語に対する強い抑圧が働いたに違いない。同化政策が人々の心を厚い雲のようにおおっていたが、それにもっとも敏感に反応したのは子供たちであったと思われる。したがってバイリンガリズムは安定状態を維持しえなかった。その子らが成長し家庭を築くようになると、新しく生まれた次の世代の子供たちは両親からさえもアイヌ語を聞くことがないため、日本語のモノリンガルになってしまう。現在ではそのようにして育ったアイヌが圧倒的に多い。しかし、一世代前の、一旦習得した母語の発達を学童期以降抑圧してしまった人たちはいわば潜在的バイリンガルとしてまだまだたくさんいる。そのような人たちがいる限り、たとえアイヌ語が聞かれなくなったとしてもアイヌ語は死語とはいえない。アイヌ語はその人たちの頭の中に秘められているからである。

ところで、言語あるいは方言も隔離を前提とした文化現象である。津軽で行われている日常語と薩摩で行われている日常語は同じ言語の別方言なのだろうか。それとも別の言語なのであろうか。薩摩とそれからほど遠からぬ奄美の日常語は、津軽と薩摩の隔たりよりもはるかに大きいという。琉球列島の諸方言の差異はたとえば北端の奄美と西端の与那国とではやはり津軽と薩摩ほどの差があるだろう。言語の数が三千とか七千とか言われる背景にはこのような事情がある。アイヌ語と津軽の関係は津軽と与那国の差どころではない。完全に別の言語である。

そのアイヌ語にもさまざまな方言があったが、その多くはほとんど記録に残らないうちに滅びてしまった。現在もっともよく研究され、また話し手の数、ないし話せはしないが聞くのは分かるという人の数の多い方言は沙流川流域に行われている方言である。テキスト化された資料も数多い。相当整った辞典もある。アイヌ語復興運動が盛んになってきたと上で述べたがアイヌ語の残されていない地方のアイヌは沙流方言を学ぶことが多いようである。アイヌ語の標準語が将来できるとすればおそらくそれは沙流方言が基礎となるであろう。

しかし標準語の制定などは研究者の仕事であってはならないと思う。研究者はアイヌ語の音声、語彙、文法、テキストを整備するにとどまるべきだ。共通語を作ろうという意志をもったアイヌがそれらを利用してアイヌ文学を興して行くうちに規範的な標準語が形成されていくものと思う。

アイヌ語の研究者でもっとも多いのはアイヌ語地名研究の分野である。古地図や探検家たちの日誌などの文献研究と実地観測とにもとづいた興味深い研究が盛んに公刊されている。私も学生諸君と札幌の地名を研究したことがある。頭と体を使う、しかも自然が相手のきわめて健康的な研究分野である。

（きりかえ　ひでお　工学部助教授）

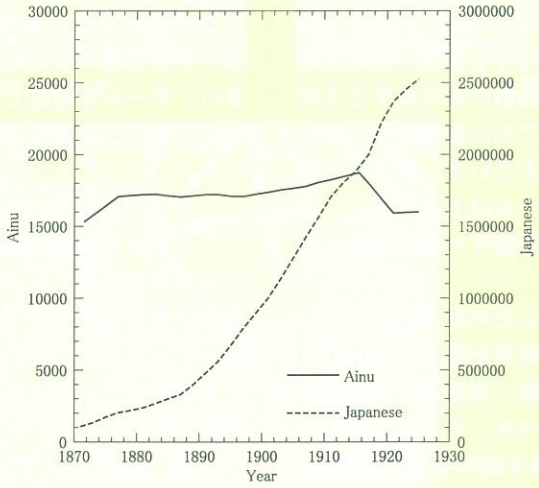


Figure 1. Ainu and Japanese Population in Hokkaido and the Kuril Island from 1872 to 1925

部室拝見④

YOSAKOIソーラン祭り北海学園大学チーム

代表　大久保　雅　春

私たち〝YOSAKOIソーラン祭り北海学園大学チーム『粋～IKI～』〟の活動は、北海学園大学内の他の団体やサークルと比べるとやや特殊だと思われる。

年間を通しての目的は、いまや札幌の初夏の風物詩となったYOSAKOIソーラン祭りに参加することであり、チームに所属するメンバーは学園生を中心に100名を越える。本祭に参加するにあたっての主な費用は、企業にスポンサーとしてバックアップしてもらうことによって賄っている。

YOSAKOIソーラン祭りは、1991年に一人に大学生が高知県のよさこい祭りに感動したことがきっかけとなり、学生のスタッフが中心となって祭りを運営、「街は舞台だ」をテーマに1992年6月13日、高知県のチームを筆頭に10チーム、1000人の参加で産声をあげた。基本的な参加条件は2つで、曲の中にワンフレーズでもソーラン節が盛り込まれていることと、手に鳴子（元々は田畑の鳥避けとして用いられていたもの。3本の拍子木によって音が鳴るようになっている）を持って踊ることである。衣装や振り付けなどは、それぞれのチームの個性を生かして自由に作り出すことができる。以来回数を重ねるごとに参加チーム数、会場数、観客数は着実に増えていき、第8回を迎えた今年は、なんと300チーム以上が参加し、5日間にわたって初夏の札幌を祭りの熱気に包み込んだ。

私たち学園チームが発足したのは1996年の夏、学園生を中心としたお祭り好きが集まって結成した。そして、翌年2月の千歳・支笏湖氷濤祭りや小樽ウィンターフェスティバル、さっぽろ雪祭りなどでの踊り披露を経て、第6回の本祭に初参加、以来「和風で粋なチーム」を目指して毎年本祭に参加している。YOSAKOIソーラン祭りには、参加チームを対象とした様々な賞が存在し、私たちもその受賞を目指して練習に取り組んでいるが、それ以上に、メンバー全員が楽しく踊れるチームを目標にしている。

年に一度の祭りを成功させるためには、踊り子としての練習の他に、実際にチームを運営していくために必要な仕事をこなしていかねばならない。スポンサーとの話し合いを行ったり、本祭で使用する曲や振り付け、衣装、地方車（荷台にスピーカーなどを載せて装飾で飾り付けたトラックで、一種の山車のようなもの。パレード会場で使用する）の原案を出したり、チーム総会を開いてメンバー一人ひとりの意見を出しあったり、練習場所の確保や新入部員の勧誘をするなど、仕事の量は本祭が近づくにつれて増えてゆき、直前には踊りの練習量とともにピークに達する。運営に関わるメンバーはもちろん、チームの踊り子全員が最も忙しい時期である。

「なぜ一年に一度しかない祭りにそれほどの労力を費やすのか」と疑問に思う人もいるだろう。いまや国内有数の規模にまで発展したこの祭りは、一方で様々な問題点を抱えているとの指摘も多い。チームを発足してまだ日の浅い私たち自身も、クリアしなくてはならない課題も多く抱えている。

しかし、たくさんの問題や様々な葛藤、何カ月にも及ぶ練習を乗り切り、年に一度しかない祭りを笑顔で迎えたときの感動は、それまでの辛かったことや苦しかったことを吹き飛ばすだけの力を持っている。まだYOSAKOIソーラン祭りを見たことがないという人はぜひ一度、街全体を動かすようなあの熱気とパワーを観にきてほしいと思う。

「祭りを楽しむこと」が私たちの大前提であり、年間の活動のほとんどは本祭に向けてのものだが、本祭以外の踊り披露なども積極的に行ってい

る。これまでの活動としては、道南・南空知などの各地方大会の参加や、札幌または札幌近郊でのイベントでの踊り披露などがある。特に夏季は市内各所で夏祭りが行われ、イベントの一環として踊り披露を依頼されることが多い。

これまで行ってきた学内の活動では、新入生勧誘踊り披露、十月祭での出店とステージでの踊り披露、謝恩会での踊り披露などがある。また、チーム内外の交流も盛んで、新歓コンパや忘年会、本祭終了後の打ち上げなどの定例飲み会の他に、毎年2月に行われる合宿や5月のお花見、他の学生チームとの合同飲み会など、年間を通して様々な企画がある。

最後に一つだけ宣伝させていただくと、私たちは第9回のYOSAKOIソーラン祭りに向けて、すでに活動を始めている。興味がある方は、参加に関する説明や練習の見学なども常時受け付けているので、学年を問わず参加してほしい（他大学生や社会人も歓迎です）。

（おおくぼ　まさはる　経済学部2年）

"粋"の1年間の活動

4月	新入生歓迎・勧誘踊り披露
5月	円山公園での花見練習
6月	YOSAKOIソーラン祭り
7月	南空知大会
8月	各種踊り披露
9月	〃
10月	十月祭でのステージ踊り披露
11月	新旧交代式
12月	忘年会
1月	（来年へ向けての製作活動開始）
2月	強化合宿
3月	

▲大通り公園でのパレード

▲新琴似にて

◀総勢120名のメンバー

おすすめしたい韓国

水　野　邦　彦

韓国は歴史的にも地理的にも文化的にも日本にもっとも近い国で、韓国旅行は近年ますます盛んになっている。けれども韓国は何よりも日本が36年間にわたって植民地化した国であるので、韓国旅行をツーリズムにのったノーテンキな物見遊山に終わらせるのは望ましくない。韓国人は、なにも個々の日本人を責めたてるわけではないが、ただ日本人に韓日の歴史を知ってほしいと望んでいることは確かである。私たちにはそれに応える責任があると思う。

年輩の韓国人は日本語ができるんでしょ、といってそれを頼りにする姿勢は考えものである。年輩の韓国人にとって日本語は、日帝時代にむりやり覚えさせられた屈辱の言語なのである。韓国を訪れる日本人は多少とも韓国語を学んでゆくことを私はすすめたいが、その余裕がなければ、片言の挨拶の言葉と礼の言葉だけでも覚えてゆきたい。過去に学生を連れて訪韓した経験からしても、ほんの4～5種類の決まり文句を使えるようにするだけで、学生たちの韓国旅行の充実度が高まったと思われる。脱亜入欧的感性を身につけた日本人はこれまであまり韓国のことを知ろうとしなかったし、ましてや韓国語を学ぼうとしなかった。こういう状況を、ぜひ私たち北海学園大学の者が率先して打破してゆきたいと思う。

さて、ここでは日本人があまり行かない見学ポイントをいくつか挙げてみよう。

タプコル公園(別名パゴダ公園)：ソウルの鍾路(ちょんの)にある公園。三一独立運動の起点となり、独立宣言文が読みあげられたところで、独立運動の様子を伝えるレリーフが多数かかげられている。とくに夏には年輩の人たちが集まってきて、将棋をさしたりしており、日本人を見かけると話しかけてきたりする。かつて千歳飛行場建設で強制労働を経験した劉載晃さんというご老人が、何年か前までは毎日この公園にいて日本人にいろいろ説明してくれていたが、今もおいでだろうか。

西大門監獄跡(そでむん)：地下鉄「独立門」駅の近くにあるレンガづくりの獄舎。おもに抗日韓国人たちを閉じこめていた監獄で、かの柳寛順もここで拷問により殺された。

安重根記念館(あんじゅんぐん)：南山(なむさん)の途中に立てられている記念館。確乎たる信念のもとに朝鮮統監府伊藤博文を暗殺した安重根にかんする資料などが展示されている。南山の頂上には街の夜景を一望の下に見渡せるソウルタワーがあるが、タワーにはロープウェイで直行するのが便利であるため、この記念館に寄るにはわざわざ下から歩いて南山を登らなければならないという難点、しかも少々きつい道のりであるという難点がある。

明成皇后(閔妃)記念碑(みょんそんふぁんふ　みんび)：ソウル第一の観光スポットである景福宮(きょんぼっくん)の境内のいちばん奥に建てられている。日本の公使であった三浦悟楼の指示のもと、浪人たちが王宮に侵入して朝鮮王妃を殺害し、庭で焼き払った現場である。

独立記念館：ソウルから急行電車で1時間ほど南の天安(ちょなん)という町の郊外に1987年に建てられた広大な記念館。そのほとんどが日帝侵掠の様子を記録する展示物で、たいへん勉強になる。ただし、第7展示館は解放後（戦後）の韓国についての展示で、〝アメリカさんありがとう館〟的な色彩が濃く、親米イデオロギーが感じられる。天安駅からバスで40～50分かかるという交通の便の悪さが難点。

最後に韓国を知るのによい書籍を少しだけあげておこう。いずれも本図書館にある。

小林慶二ほか『観光コースでない韓国』高文研、1994年［292.109　Ko 12］

早乙女勝元編『柳寛順の青い空』草の根出版会、1995年［221.01　Y 96］

高崎宗司『反日感情』講談社現代新書、1993年

（みずの　くにひこ　経済学部教授）

閲　覧　室

○ライブラリー・カード未発行の学生は至急、申込みを！

図書館のコンピュータ・システムが5月に導入されました。ハードはIBM製で、図書館システム・ソフトはLibVisionといいます。今までに開架図書7万冊の内、分類番号：300～399（法律・経済・経営・社会・教育学等社会科学関係）、800（語学）、900（文学）代の計3万5千冊、工学部分室分の1万冊、合計4万5千冊の図書データ入力が終了しました。現在、開架の残り半分の利用度の高いものから遡及入力しています。近い内に、Home Pageを立ち上げ、OPAC（オンライン蔵書目録）をインターネット上に公開する予定です。3F閲覧室にOPACとインターネットの検索が自由にできるPCブース4席が設けられました。2F閲覧室にも5席設置予定です。工学部分室にも設けられました。こちらも近く運用開始の予定です。

11月1日からは、貸出・返却のコンピューター処理を始めました。従来の書く手間が省け、貸出・返却の手続きが簡単で早くなりました。

ライブラリー・カードをまだ、お持ちでない学生は至急、申込みをしてください。

※試験期間中も通常通り、貸出します。

○ AVブースの増設

従来のAVブース3席に加え8席が新たに増設され計11席になりました。

新設ブースでは、カセット・テープ、ビデオ・テープ、CD、LDの他にDVDも利用できます。

○エレベーターで2F・3F閲覧室へ行けます！

今まで、学生の利用者諸君の2F・3F閲覧室へのアクセスや階段だけでしたが、エレベーターが1基増設され、1Fエントランス・ホールから乗って、2F・3F閲覧室へあっという間に行けるようになりました。

ご利用ください。

尚、ブック・ディテクション（図書紛失防止装置）も2F・3F閲覧室入口に1基づつ設置しました。

レファレンス・サービス係

平成11年6月1日よりレファレンス・サービス係の業務を開始しました。

2階閲覧カウンターに向かって左奥に、レファレンス・カウンターと事務室があります。探している本・雑誌等がどこにあるか、特定のテーマについてどんな資料があるか、またインターネット情報の提供、図書館の利用案内、他機関の紹介等幅広く利用者の方々のお手伝いをしています。

さらに、学内に所蔵していない文献は、他大学図書館より電子複写（コピー）、又は現物貸借によって入手することができます。いずれも実費です。

利用時間	月～金	9：30～17：00（お昼休　12：00～13：00）
	土	9：30～12：00

上記時間帯以外のレファレンス申込は、閲覧カウンターで受け付けます。

電話によるお問い合わせは、内線129番です。

お気軽にご利用ください。

日本語ルーツ東西探訪（その4）

日本式カタカナ英語を考える（その二）

河　井　達　雄

日常的に使われているカタカナ英語は国内で通用しても、外国人には奇妙な意味不明の発音とか表現になるのが多い。英語がどのように日本化するのかを次のように分類してみた。

1．「語尾を引きのばす」**オックスフォード、スタンダード、プライベート、シリーズ**など。〝Oxford〟（オックフスファド）、〝standard〟（スタンダド）、〝private〟（プライヴィット）、〝series〟（シーリズ）なのであるが、そのように改めることは不可能であろう。

2．「濁音を清音にする」**ブルース、タイムス、マナー、カンサス**市など。〝blues〟（ブルーズ）、〝times〟（タイムズ）、〝manners〟（マナーズ）、〝Kansas City〟（カンザス市）など。正しい表現になっていることはとても少ない。

3．「ローマ字発音で読む」**メディア、イスラエル、ウルトラマン、ラベル**など。〝media〟（ミーディア）、〝Israel〟（イズラエル）、〝Ultraman〟（アルトラマン）、〝label〟（レイベル）など。

4．「英・米発音を混用する」**モータリゼーション**〝motorization〟（モータライゼーション〈米〉）。**ノーマライゼーション**〝normalization〟〈米〉。**ホームヘルパー**〝home helper〟（イギリス）。**ホームヘルプ**〝home help〟〈米〉。と、とてもややっこしい。

5．「名詞と名詞をつなげる」**リサイクルペーパー、エンタイトルツーベース、スケートリンク、ゲームセット**など。〝recycled paper〟（リサィクルドペーパー）、〝entitled two base〟（エンタイトルドツーベース）、〝skating rink〟（スケーティングリンク）、〝geme and set〟（ゲームアンドセット）と、外国人と話すときは再翻訳せねばならない。

6．「略語を発明する」**EV、SL**など。〝elevator〟、〝steam locomotive〟の略字形は英語にはない。EVは〝electric vehicle〟（電気自動車）または〝eletron volt〟（電子ボルト）のことであるから、外国人がエレベーターをうろうろ捜している姿が目に映る。

7．「余分な語をつけ加える」**トランクルーム、アンブランスカー、ワーストワン、ダービーハット**など。〝trunk〟（トランク）、〝ambulance〟（アンブランス）、〝worst〟（ワースト）、〝derby〟（ダービー）でよろしいのである。日本人、考え過ぎなのであろうか。

8．「意味をとり違えて用いる」**バンカー、ギブアンドテーク、マンション**など。〝banker〟（銀行員でなく銀行経営者）、〝give and take〟（お互いの利益のやりとりではなくて、会議や議論の中で妥協点を見つけること）、〝mansion〟（スプリンクラーのある芝生、テニスコート、プールなどのある豪邸）で、むやみに用いると誤解を招く。順に〝bank employee〟、〝compromise〟、〝apartment〟が正しい。

9．「誤解を受けやすい語を用いる」**デリシアス**〝delicious〟（お世辞語。食事に招待されてもうっかり言えない）。**チャーミング**〝charming〟（魅力的な、という意ばかりでなく、男をまどわす、男好きのという意もある）、〝short eyes〟（近眼であるというつもりで言えない。幼児に対する変態異常性欲者）。**フルムーン**〝full moon〟（フルムーン満月の旅に出かけよう、の意ばかりでなく、気が狂う、精神錯乱の意もあるので、旅のPRに使うのは要注意）。JIVE（自動販売機で売っている。マリファナとか、その他、極めて猥褻（わいせつ）な意があるので商品名に用いるのは控えてもらいたい）。気の利いた、カッコいい表現と考えて産み出した表現でも、深くその意味を調査吟味するべきと考える。

その他、数百のカタカナ和製英語があるが、別の機会に述べてみたい。

（かわい　たつお　元北海高校教諭
TOEICインストラクター・元HBCラジオ
「ワンポイントイニングリシュ」講師）

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.21　No.4（通巻152号）
本館　〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　工学部図書室　〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード